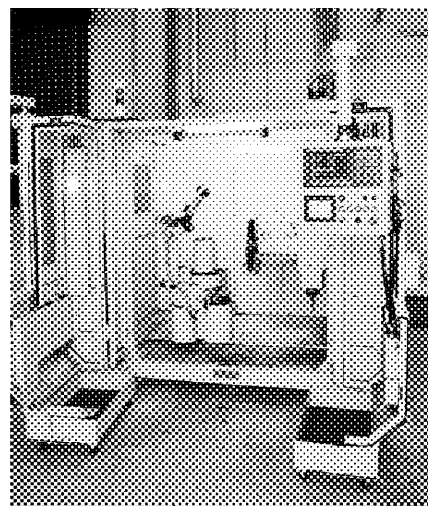


ヤマザキ

# バリ取りロボ拡充

## 可搬重量3種シリーズ化

【浜松】ヤマザキは  
 鋳物用ロボットバリ取  
 りシステム「スーパー  
 デバセンターSDC22  
 シリーズII写真」の製  
 品群を拡充する。加工  
 対象物（ワーク）と治  
 具を合わせた可搬重量



の仕様を15<sup>キ</sup>・50<sup>キ</sup>・150<sup>キ</sup>の3種類でシリーズ化し、200<sup>キ</sup>・300<sup>キ</sup>の台の特注にも対応する。消費税抜きの価格は1000万～5000万円程度。

主要顧客の自動車以外の業界を開拓する商品と位置づけ、5年以内の年間50台で約10億円を目指す。

SDC22シリーズは2020年にユーザーの打診を受け、鋳物のバリ取りで発生する粉塵対策を施した上で、水平多関節（スカラ）

ロボットやタレット、制御ソフトを組み合わせて開発した。

同年の発売以来これまで20台程度受注している。人手不足の深刻化に伴い、作業環境が過酷なバリ取り工程への自動化ニーズが一層高まるとみて、製品を拡充して受注活動を強化する。

専用機メーカーの強みを生かし、3種類以外にも200<sup>キ</sup>・300<sup>キ</sup>の台の重量の特注仕様や、自動パレット交換装置（APC）の追加にも対応する。